

大町 桂月（おおまち・けいげつ）

1、プロフィール

「太陽」「文芸倶楽部」「中学世界」に文芸時評、評論、紀行文などを執筆、硬派の評論家としてならず。各地の山水探勝による紀行文はその道の第一人者と目された。

<生没>

1869(明治2)年1月24日 ~ 1925(大正14)年6月10日

<代表作>

『美文・韻文 花紅葉』(共著)『文学小観』『奥羽一周記』

<青森との関わり>

明治41年十和田湖を訪れ世に紹介。大正12~13年鳶温泉に逗留、14年3月鳶に本籍を移し6月同地で逝去。

2、作家解説

高知市に生まれる。本名芳衛。明治義塾、独逸協会学校などを経て第一高等中学校へ。浅香社結成に参加。明治26年帝国大学文科大学国文科入学、「明治会叢誌」「帝国文学」に評論、美文、新体詩を寄稿、大学を卒業した29年には塩井雨江、武島羽衣と詞華集『美文 韻文 花紅葉』を著し脚光を浴びた。詩は擬古的で優雅であり、美文は能文に加えて対象への熱烈な愛情と明治的国民精神のほとばしりが感動を呼ぶものであった。『美文 韻文 黄菊白菊』も美文の代表作。ついで雨江、羽衣らと『国文学大綱』を編集、巻之一に評伝「契沖阿闍梨」、さらに『支那文学大綱』では巻之二に「白楽天」を書いて名声を得、雨江、羽衣らとともに大学派、赤門派と呼ばれた。

明治33年博文館入社後は「太陽」「文芸倶楽部」「中学世界」に文芸時評、評論、紀行文などを執筆し、硬派の評論家として高山樗牛と並称された。このころ文筆活動は旺盛をきわめ、評論・随筆集に『文学小観』『日本文明史』『筆のしづく』

『我が文章』などがあり、『学生訓』などの修養ものもよく読まれた。人格陶冶の文章道を提唱し、文章論の『日本文学史』は先駆的業績として名高い。酒がもとで博文館退社後、古今東西の傑物の評伝や国漢の注釈書も書いたが、桂月の面目は生来の旅好きとあいまって、紀行文に発揮された。十和田湖紹介の『奥羽一周記』はとくに名高く、ほかに『行雲流水』『関東の山水』などの紀行文集がある。

十和田湖を訪れたのは雑誌「太陽」の主筆鳥谷部春汀の誘いによるもので、明治41年8月下旬であった。その後大正10年雪の時期に再訪、12年から13年にかけては児玉花外と蔦温泉に冬籠りし、地元の小笠原臥雲らと親交、13年には全国行脚を志し旅に出、12月23日に蔦温泉に帰る。そして14年3月に蔦に籍を移しここを永住の地と定めたがその時病気はすでに進行しており、6月6日大吐血、同10日に逝去した。蔦温泉に墓が築かれ、板留温泉、仏ヶ浦、夏泊半島、焼山、大間等、県内各地に歌碑がある。

3、資料紹介

○『十和田湖』

図書

1936(昭和11)年8月1日

190mm×130mm

十和田湖国立公園記念、大町桂月13周年記念出版。桂月の十和田湖付近に関する遺文等を集め編集したもの。遺子大町芳文、青野季吉らの序に児玉花外の桂月を悼む「噫文豪大町桂月」という詩、田中貢太郎の「桂月先生終焉記」の文章等も掲載している。